

PASJ 月刊化に向けて

祖父江 義明

〈日本天文学会理事長〉

e-mail: sofue@ioa.s.u-tokyo.ac.jp

PASJ (Publications of the Astronomical Society of Japan) は、日本天文学会が、天文・宇宙科学の成果を世界に発信する重要な国際誌です。そして日本の天文学を評価するための貴重な資料です。質と量ともに我が国の天文学のレベルに即し、世界の研究者がこぞって投稿する、より優れたジャーナルに変革するステップとして、PASJ 月刊化の議論を、評議員会・理事会や編集部で始めています。なぜ PASJ 月刊化なのか、会員の皆さんと一緒に考えていただきたく、次のような観点を一文をしたためました。

1. 学会発展と連動：実力のバロメーター
2. 日本天文学会で発表した論文を、他学会誌に印刷？
3. 引用率：学会誌に頼るのでなく、自分は学会誌に何ができるか
4. 月刊化に向けての方策
5. 学会誌は会員次第

1. 学会発展と連動：実力のバロメーター

(1) 活動のバロメーター：日本天文学会の実力、我が国の天文学関係の予算規模、そして科学における国際貢献の度合いを、客観的・歴史的に判断する資料として、学会の出版物は永遠に残ります。PASJ をこのような観点で考えるとき、年間6冊というのは、他国のジャーナルに比べて、いかにも不釣り合いです。

我が国における天文学の発展は、予算的、人的、質的に、そして何よりもその成果を見るとき、目を見張るものがあります。それは、年会の盛況ぶりを見ても明らかです。PASJ は、その成果を世界に発信する重要なメディアとして、そしてアクティビティーのバロメーターとして、学会と呼応して発展するのが自然です。

(2) 年会の発展と連動：学会活動の一つの物

差しとして、年会での論文発表数があります。喜ばしいことに、年間1,300もの論文が発表され、指数関数的に増加しています(図1)。ところが、PASJ に印刷される論文は、その10%にすぎません。仮に20%に改善されれば、優に月刊PASJ を実現し維持できる分量です。

(3) Letters: 出版頻度の面からも、「Letters をもつ国際誌」としては、月刊、あるいはより頻繁な出版が望まれます。

2. 日本天文学会で発表した論文を、他学会誌に印刷？

(1) 効率：日本の資金で日本人が行った仕事の成果発表で、年会在活況を呈しているのは、喜ばしい限りです。ところが、発表された成果のかなりの部分が、印刷費は、著者もちで、米学会誌などに印刷され、歴史的には米欧の成果として残ります。このこと自体悪いことではありません

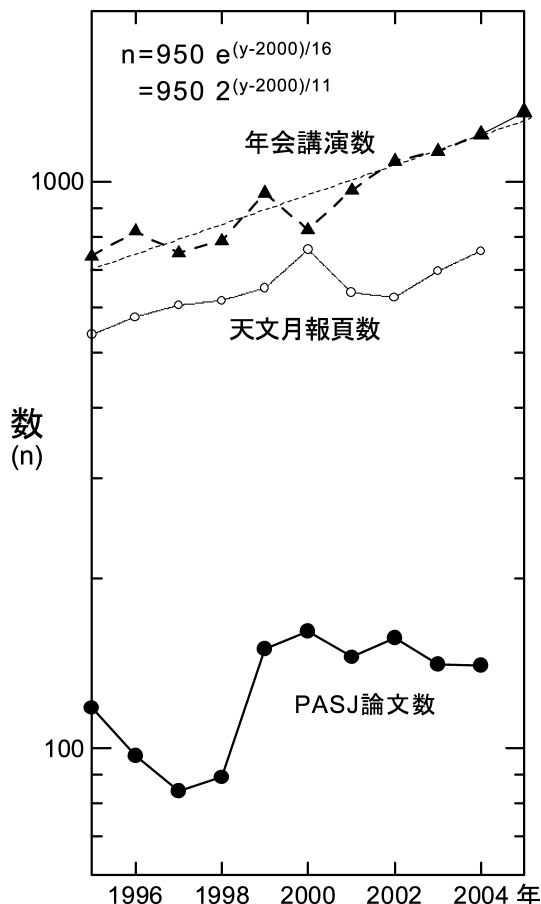


図1 ●PASJ 論文数, ▲学会講演数, ○天文月報ページ数 (いずれも年間) を対数で見た推移。横軸は西暦年。学会講演数は e-folding time 16 年 (増増時間 11 年) の指数関数で増加。PASJ 論文数はこれに連動せず, ここ数年は下降傾向 (1999 年のジャンプは掲載料半額キャンペーンの効果)。 (データ収集は PASJ 事務局の黒岩さん。)

が、問題はその割合です。日本天文学会誌への投稿比率が、もう少し増えれば望ましいと思います。

(2) 他国では：憶測ですが、米天文学会で発表された論文は、かなりの割合で ApJ (The Astrophysical Journal), AJ (The Astronomical Journal) に投稿されるのではないかと思います。ヨーロッパと AA (Astronomy and Astrophysics), 王

立天文学会と MN (Monthly Notices of the Royal Astronomical Society) についても同様でしょう。

誤解のないように断っておきますが、投稿先は自由です。学会で発表したら、何が何でも PASJ に、といているのではありません。ただ、論文リストのほとんどが MN, AA という米学会員がいたとして、その人に米予算は潤沢にくるのだろうか、といった疑問もわいてきます。我が国ではその辺りたいへん大らかなのは良いのですが、自分の足元の学会誌を見直してみるのも大切ではないでしょうか。

3. 引用率：学会誌に頼るのでなく、自分は学会誌に何ができるか

(1) 引用率の誘惑：引用率の高い雑誌に投稿した方が得、という議論を聞きます。しかし、同じ論文を二つのジャーナルに載せて比較したデータがない以上、これは余り意味のある主張とは思えません。AstroPH, ADS の時代に引用率を上げるのは、一にかかって論文の質と量、そして著者の知名度です。

(2) 自分で開拓：同じ著者が米欧誌に載せた論文より PASJ に載せたものの引用率が低いとしたら、それは要するに、より良い論文を米欧誌に出しているということではないかと思えます。より優れた論文を PASJ に載せるようになれば、自ずと引用率も上がるはずで、ApJ は素晴らしい雑誌ですが、それを作り上げてきたのは米天文学会の人々です。

学会 (誌) が何をしてくれるか、ではなく、自分は学会 (誌) のために何ができるか、を考えることも大切です。

4. 月刊化に向けての方策

(1) 誰に頼るか：PASJ をより立派な、質量ともに充実したジャーナルに育てていくためには、会員諸氏が、自分の学会誌だという意識をもつことが大切です。評議員、理事、編集委員、編集

問、各種委員など、学会を代表して活躍されている方々に、PASJに投稿する姿勢と意識をもっといただき、院生や同僚を牽引していただくのも一案です。海外の共同研究者も引き込めばさらに効果が上がるでしょう。そして何にもまして、若い世代が、21世紀の世界を文化的にリードしていく気概で天文学にのぞみ、会誌を通して実行していかれることに期待します。

(2) 飽も用意：とはいえ、精神論だけで世の中が動くものでないのも常です。大樹の陰で得した方が良いという声とそれなりの論理ももっともです。そこで編集部と理事会では、会員への優遇措置なども含む、より投稿しやすい環境づくりに向けて知恵を絞っています。

(3) 編集の努力：もちろん、過去において編集レベルの努力は着々と行われてきました。かつてレフェリー2名の非常にきつい査読がなされ、賛否両論と投稿者の不満はありましたが、質の高い論文がそろそろようになりました。その後レター、レビュー、サプリメントの開設、A4化、TeX化、電子化、二度にわたる表紙の一新があり、現在一定の質とボリュームが維持されています。しかし、特に量、すなわち投稿数を増やすには、実務だけでは限界があります。

5. 学会誌は会員次第

学会の3大活動は「年会」、「欧文研究報告」、「天文月報」です（学会ホームページ）。幸い春秋

の年会は年々盛大になり、講演数はうなぎ登りです。レベルもますます上がり、学会主催・共催のたくさんの行事や多様なセッションが目白押しです。天文月報は近年めざましく良くなり、スタイルも一新して届くのが楽しみです（図1）。

次の飛躍として、PASJを質と量ともにさらに充実させ、月刊化を目指すというのはいかがでしょうか。それは会員諸氏の意識しだいで、遠くから実現可能だと信じています。

以上、私たちがPASJを独自に発行し、発展させていくことを前提に書きましたが、それをとりまく情勢や異なった考え方について触れておきましょう。まず、天文学は国際的なものだから、世界に一つか二つの優れたジャーナルがあればよいとする考えがあります。一方、メディアを統合するのは好ましくなく、いろいろな学会や地域が競争的、批判的に出版物を持つのが良いとする考えもあります。実際には、これらが混在し淘汰しながら、バランスを保っているというのが現状でしょう。関連して最近、アジア太平洋地域で独自の天文学ジャーナル (*Asian-Pacific Journal*) を立ち上げようという機運があり、日本も参加が期待されています。これについてはPASJの将来とも関連することなので、編集部が対応し調査中ですが、いずれ学会としてきちんとした議論をしていく必要があります。